

私にとって言語文化教育とは何か

生きた言葉の創造

理論研究「言語文化教育研究」から

市嶋典子

はじめに

私は今学期、言語文化教育研究の理論と総合活動型日本語教育の実践を平行して受講した。実践でも理論でも考えなければならないことは盛りだくさんであった。今まで考えてもみなかったことを考えさせられ、そこから自分なりの立場をうちださなければならず、その作業は決してやさしいものではなかった。しかし、二つの講義を平行して学べた事により、理論で話されている事を実践で直接体験し、実践で体験したことを理論で再確認できた。そうやって、理論と実践のつながりを肌で感じる事ができたことは私にとって大きな収穫だった。

また、言語文化教育研究の授業でのクラスメイトとのインターアクションも大きな役割を果たした。BBS やクラスでの他者の発言によって、自分にはない視点に気付かされ、時には感心し、時には反論することもあった。今でも印象深く残っているのは、他者とのズレを埋めるための言葉を探す苦労や、自分の主張したい意図が伝わった時の喜びを実感したことである。

本稿は、言語文化教育研究の授業の中でのインターアクションを通して考えたこと、認識を新たにした代表的な例を挙げながら、「私にとって言語文化教育とは何か」という問いに、自分なりの答えを打ち出してみたい。

1. 情報の捉え方

私は、講義の始めに書いたレポートの中で、「私の文化」は外にあるものではなく、中にあるものである、と書いた。伝統文化や文学も外にある「情報」としか捉えられないうちは、真の意味での「私の文化」にはなりえない。しかしそれを自分自身の中に取り込めた時、例えば文学作品を読んで何かを感じ取り、その中で自分との関係性をつかめた時、そしてそれを意識化できてはじめて、「情報」を超えた「私の文化」となりうる、と続けている。ここで注目すべき点は、私が「情報」が外に

ある場合は「情報」としてそのまま捉え、その「情報」が自分の中に根付いた場合は文化として認めている所である。

言語文化教育研究の講義では、情報の与え方についての議論が巻き起こった。議論の中で、学ぶべき内容というのは、学習者の中にあるものであり、それは、学習者が考えていること、言いたいことを指す。それをどうやって引き出していくかが、教師の重要な役割の一つであり、教師が一方的に情報を与えることへの疑問、問題が提起された。考えてみると、多くの場合、授業で扱われる、学ぶべき内容とはいったい何なのかを教師間できちんと議論される事は少ない。教師は学習者の役に立つと思うような情報集めに多くの時間を割く。そうやってかき集めた情報を、その意味を深く考えることなく、学習者に提示してしまう。意識は、情報を集めること、それをいかに提示するかに集中し、集められた情報の内容については、あまり疑問をもつことはない。しかし私は講義の始めに書いたレポートに次のように記している。

外からの情報も、自分の中に取り込めたとき、自分との関係性が認識されたとき、情報を超えた「私の文化」になりうるのではないだろうか。

このことから分かるように、外からの情報であっても、それが自己に内在化した場合情報を超えたもの、つまり内容になりうると考えていた。他者に提示された情報であっても、価値のあるものであれば、その「情報」が刺激となり「内容」に発展する可能性を信じていた。そして私はBBSの掲示板に、情報を与える事を肯定的に捉えることもできるのではないかという主旨のものを書き込んでみた。それに対して、クラスメイトのEさんが以下のようなコメントをしてくれた。

その「情報」が何故選ばれるのか、「私」をくぐらせ価値観のともなっているものなのかそれが重要であり、そうでなければ単なる「情報」、逆なら「内容」に発展していく可能性があるものと考えてみました。

このコメントを読んで私は、もし教師が選択した情報について「私」をくぐらせ、何故その情報を選んだのかを明確にできるのであれば、やはりそれを積極的に活用することができるのではないかと受けとめた。つまり、教師が納得して選んだ素材であれば、それは否定されるものではなく、むしろ肯定的にとらえ、授業にも積極的に活用できるのではないかと考えたのだ。

しかしSさんの別の書き込みを通して、私はもう一度考え直す事となる。

「何故その情報なのか」という問いにはかなり教師の価値観に左右されると思うのです。もちろん教師が与えたい情報をいつも学習者に与えられるとは限りませんが、教師の選んだ基準となる価値観が偏っているものであったり、反社会的であったり、あるいは何か宗教的なものに基づいている場合、選ばれた情報自体も偏ってしまう恐れがある。

確かに、情報を選ぶ時には教師の価値観が大きく左右する。その時、本人が価値のあるものと信じて学習者に提示したとしても、もしかしたら教師の価値観の押し付けになったり、そのことによって情報の質に偏りが生まれやすくなるかもしれない。どんなによく考えて、「私」をくぐらせて情報を選んだとしても、それは「私」にとっては内容になりうるかもしれないが、学習者にとっても必ずしもそうであるとは限らない。教室にいるメンバー全てに興味を持ってもらえる情報、内容を選択するのは不可能に近い。

また、教師が選んだテーマや題材だった場合、その内容を把握し、熟知しているのは教師になり、両者の間の知識と情報量の差は歴然としている。そこには自然と力関係が生まれる。情報や内容の鍵を教師が握っていた場合、結局は教師から学習者に知識を伝授するというパターン、一方向的な関係が形成されてしまう。

しかし、学習内容を学習者自身が選択した場合どうだろう。自分で選んだ題材やテーマは、学習者自身が一番良く理解していることであり、そのテーマを語る主体は教師ではなく、学習者になる。学習者一人一人の持つ内容を言葉によって表現し、対話を通して学びあうことによって、情報の一方向的な授受関係は崩れる。このようにお互いが学び合える環境と言うのは、内容の鍵を誰か一人が握っていたのでは成立しないと考えられる。一人一人が持つ内容を自律的、創造的に表現し、交換し合える場が成立してはじめて成立すると言える。

一方で、外からの情報をテキストそのものの文字面の理解、表面的な内容把握を超えた学びに結びつけることは難しい。学習者一人一人の中にある内容は、それぞれにとって切実で、興味関心のあるテーマであると言える。だからこそ、自分の内容について、自問自答を繰り返し、内容を深化させる機会が与えられる。しかし、中にある内容を言葉によって外に出した時点で、それは他者にとっては情報として受け取られてしまうことも否定できない。その人にとっては切実な内言であっても外言化されたものは、他者にとっては一情報にすぎなくなる。他者から発信された一情報に無関心な学習者がいても不思議ではない。しかしそこには、自分にはないものの見方、専門性、長所が盛り込まれている。学びの可能性を秘めた素材である

と言える。自分に興味のあることにだけ目を向けるのではなく、他者の内容に接することによって、新しい視点、考え方を構築していくこともできる。内容を自己完結的に掘り下げるのではなく、他者からの情報をも自分の中にとりいれながら、自己を見直し内容を深化させる機会が与えられるとも考えられる。そうであるならば、動機文で述べた、外からの情報も、自分の中に取り込めたとき、自分との関係性が認識されたとき、情報を超えた「私の文化」になりうるのではないだろうか、という私の問いも、ある意味では肯定できるのではないかと考える。

しかし、教師が何の疑問も持たずに、安易に情報を与える姿勢は疑う必要がある。また、情報を単なる情報としてではなく、内容として深化させるためには、促進者としての教師の支援も必要になる。教師の支援のあり方は、実践を通して思考錯誤しながら、体得していくものであり、固定的に方法を明示することは難しい。マニュアル化した情報に頼るのではなく、実践の中で実際に学習者に向き合いながら、教師自身でそれぞれが支援の内容を構築していく必要があるのではないだろうか。

2. 形式への共通認識

自分が切実に伝えたい内容があったとしても、その伝えるすべである言葉が見つけれなかったとしたら、自分の思いは伝えられない。内容が深まれば深まるほど、それを伝える言葉の幅も広がっていくこととなる。講義の中で「内容の緊張度と形式の緊張度は連動している」という説明があった。私はかつて、文型や文法などの形式を充実させてはじめて、内容を深めていく事ができると思っていた。形式がともなっていない文章に内容あるものなど生まれてこないと考えてもいた。だからこそ、学習者の作文や会話の中で文法的な間違いがあれば、訂正をした。

しかしクラスメイトYさんが学習者として「は」と「が」を体得していった話を聞いたとき、私はその話から大きなインパクトを受けた。Yさんは「は」と「が」の違いを文法書や日本語教師から学んだというよりも、他者とのインターアクションの中で観察し、自分自身で探りながら身に付けていったとのことだった。自分の外国語習得経験を振り返ってみても、いくら文法事項を本や教師から学んでも、知識として頭の片隅に残ることはあっても、それを使いこなせるようにはなかなかなかった記憶がある。そう考えると、Yさんの言うように、他者とのインターアクションの中で、人の話す言葉に耳を傾けながら、その中にある言葉の法則を自分なりに発見していくことによってこそ、形式を体得していけるようになるのだろう。

そしてその形式を本人が切実に必要であると思えなければその形は定着していかないと思う。

また、自分の考えを少しでも正確に伝えるためには、表現形式を精緻化させていく必要が生じる。私は、自分の考えを伝えようとするモチベーションが高まれば高まるほど、表現形式も向上していくのではないかと考えている。表現形式は、伝えたいというモチベーションと、その内容の深化によって高められていく。つまり表現形式と表現内容は表裏一体のものであると言える。形式と内容を分離して考えるのではなく、一つのものとして考え、内容から生まれた形式こそが学習者が本当に必要とする形であり、本人が必要であると切実に感じられたそのタイミングに、その形を学ぶ事ができたら、言葉としての定着度もより高まっていくのではないだろうか。つまり、外からの情報としての形式が内容に取り込まれたときはじめて、自分の言葉として根をおろしたことになるのだ。

一方でBBSの掲示板に、Tさんは「日本で日本語を話して、日本の社会の中で生活してきた人達をかき集めれば、その集団の共通認識が必ず存在するだろうと思うし、だからこそその国の社会や法が成り立っている。それは言語にも言えることであるから、そういった共通認識としての規範を教える必要があるのではないか」という主旨のコメントをのせた。私はここで疑問に思った。この「共通認識」とは何なのだろう。誰が決めるのだろうか。集団の中での傾向だろうか。それとも、国家権力や社会規範だろうか。しかしそんなものは本当に実態のあるものなのだろうか。もし実在するとしたら、その集団や国家、社会を作り上げるのは「人」であるわけだから、そこには誰かの力が働いているはずである。そして日本語教室という小さな集団の中にもその力が存在しているはずだ。それは教室担当者である教師の力であると言える。つまり日本語教室の中で言葉の「共通認識」を決めるのは、結局、傾向や社会などではなく、日本語教師自身なのではないだろうかと考えた。

教師の考えや価値観によって、教える価値があると判断した「共通認識」としての表現形式を選び出し、それをひたすら学習者に与えていく。そしてなぜそれを与えるか、本当に必要なものなのかということらまではほとんど議論されない。これは先に述べた「情報を与えること」の問題と共通する。教師は表現形式を選び取ると、それが効果的に練習できるような場面を設定する。次にそれを定着させるために、文脈も設定する。その文脈が広がり過ぎないようにと、使用語彙までも制限していく。これでは学習者はお膳立てされた全てを、ただ機械的にこなすだけのロボットとなってしまう。そこでは内容など必要とはされてこない。このように教師が一方向的に提示した表現形式が学習者の中に定着し、自分の言葉として使えるよう

になるのかどうか疑問である。そこで扱われる言葉はバーチャルでしかない。バーチャルな言葉や形をひたすら刷り込ませていく。この「共通認識」はどうやって生まれたのだろうか。日本語教師が学習者に刷り込むように、教師も誰かに形式の「共通認識」を刷り込まれているような気がしてならない。刷り込んでいるのは誰だろうか。それは先にも述べたように他でもない、教師自身なのだと思う。

教師は、自明のこととされている「共通認識」を甘受するのではなく、時には疑う姿勢も必要なのではないかと考える。まず形式ありきで、文型や文法に便宜的に内容を足すのではなく、学習者一人一人の持つ内容に注目し、それを伝えるための言語形式を支援していく必要があると言える。また、教師の言語教育観も問われてくるだろう。その際に「共通」ではなく「個人」の視点や認識が不可欠であると言える。

3. 言語文化教育

3-1. ことばと文化

授業を通して、内容と形式の関係も見えてくるようになった。私はこの「内容」とは、「個の文化」の断片であると考えている。つまり内容を充実させるためには、「個の文化」を掘り起こさなければならない。しかし「個の文化」は「不可視知の総体」である。それを他者に認識させようとする場合、言葉が必要になってくる。そうやって自分の中にある文化の総体の一部である「内容」を切り取り他者に伝わるように、自分の言葉で表現していくことによってはじめて文化は輪郭を現す。内側にあって見えない「個の文化」は、言葉によって表現されてはじめて見えるようになる。つまり言葉と文化は切り離しては考えられない。内容と形式と同様、文化と言葉は表裏一体であると言える。つまり、これが言語文化であると考ええる。そして言語文化教育の「教育」についても考えてみたい。

言語文化教育研究の授業のはじめに、ことばと文化の教育研究史について学んだ。60・70年代に盛んだったタイプAの授業では、目に見える文化LARGECを教師が選択し、学習者に授与する。私には、文化を情報として与えるこのタイプに教育との関連は見出しにくかった。タイプBの授業では、目に見えない文化SMALLC、傾向としての共通規範をとりあげ、日本社会、文化におけるコミュニケーション能力を育成しようとする考え方を提唱している。情報だけではなく、体験も重視している点ではタイプAに比べて若干、教育との関連性は見られるが、やはり情報の

選択への問題、共通規範への認識への問題は残される。海外の日本語教育の現場では、タイプBに基づいたビジターセッションや家庭訪問なども多く取り入れられているが、情報選択においても、教師やビジターの主観に傾き偏ったものになってしまうこともあると考えられる。タイプCは、問題解決能力開発思考と表現の往還を目的とした教育であると言える。言語文化教育、総合活動型日本語教育はこのタイプCに属すると言える。私は課題のレポートの中で、「文化は相互関係の中で育まれていくものであり、創造されて行くものである」と捉えている。この育まれていくプロセスは自然発生的に起るものではない。そこにはある力、働きかけが必要となる。例えば私の「情報」や「内容と形式」についての認識（私の個の文化の断片）は、講義やクラスメイトとのインターアクションを通して少しずつ変容していった。講義やインターアクションという働きかけがあつてこそ内省が深まっていったと言える。内省は思考の深化を促進する。今まで表面的にしか考えていなかった情報や内容、形式についての概念を、一步踏み込んで考えることによって、自分の認識が深まっていったような実感がある。しかしこの認識は絶対的なものではない。またいつか今回の講義のような機会が訪れ、私の認識は更新されるかもしれないからだ。このように「個の文化」は少しずつその形を変えながら、創り上げられていく。文化と言葉は切り離せないものであるから、「個の文化」の成長は、言葉の成長をも促す。なぜなら、自分の文化を人に伝え、表現するための言葉を探す過程で、私の言葉は深化していくからだ。内容が充実すると形式も充実する、つまり「個の文化」が成長すると、それを表現するための「言葉」も成長すると言える。内容と形式を切り離して考えられないように、文化とことばも切り離しては考えられないのだ。

3-2. 教育理念

ここまで「文化とことばが切り離せないものである」と考えてきた。しかし、私自身、こんな当たり前のことに今まで、全く気が付いて来なかった。よく「言語を学ぶ事は文化を学ぶ事である」ということを聞く。私はかつてその意味を深く考えた事がなかった。それを考えるようになったのは、講義や実践に参加したことによる。理論の講義を聞くだけでは「外からの情報」の受容でしかないが、実践に参加することによって、問題を自分のものとして捉えられるようになり、主体的に考えられるようになっていった。また、文章を書き、それを公開していくプロセスを通して、他者に伝わる言葉を生み出すことにも意識的になっていった。このように私は学習者として、自分の文化を言葉で表現するということをリアルに実感できた。自分の考えている事を言葉によって表現する事、それが伝わらない時のもどかし

さ、伝えるための言葉を見つけるつらさ、そしてやっと伝わったときの喜びなどを、言語文化教育研究や実践研究、その他の授業で、リアルに体験する事ができた。主体的に考えるのは楽ではない。しかし、考えた末に生み出した言葉が他者に伝わったとき、そして、その言葉によって他者との間に、かりそめでも合意が形成されることが実感できたとき、私はうれしくて、心がふるえた。他者とつながったというその感覚は、自分の存在意義を実感させるからだ。この「存在意義の実感」こそが、言葉を伝えることの喜びにつながるのだと思う。その喜びを味わうために、私は自分を伝えるための言葉を探しつづけることをあきらめない。

私は日本語の授業でも、学習者にこの喜びを体験して欲しいと思っている。そのために、どんな授業を設定していくかを自分自身で考えなければならない。私達は学習者にばかり主体性を求めがちだ。しかしその主体性をもっとも必要とされているのは、日本語教師なのではないだろうか。「共通認識」に縛られ、現状維持に妥協していく姿勢に、教師としての主体性があるとは思えない。自分がどんな授業を目指したいかを考える事が大切でありそれが自分の教育理念につながるのだと思う。

最後のBBSでのやりとりの中でNさんが次のような書き込みをしていた。

私も方法論とか目的とかは授業で考えてきたつもりでしたが理念については考えたことがありませんでした。理念というより、言語とは何か、文化とは何かという問いを自分に投げかけたこともありませんでした。更に、日本語教育とは日本語でコミュニケーションできるようにしてあげることだと単純にとらえ、知の形成という意味での日本語教育について考えたこともありませんでした。その結果、今考えると、学習者が発した外言が文法的じゃないとか、語彙が違う等の言語形式にばかり目をむけた授業をしていた気がします。

現実にはさまざまな制約があって、自分の理念を貫きとおすことは難しいと、今でも思います。でも、以前この議論の中でどなたかが、「知っているのと知らないのとでは大きな違い」とおっしゃっていました。理念については「持つと持たないのとでは大きな違い」になるのでしょうか。細川先生はGBKは理論を考える場とおっしゃいましたが、私達が現場に行くと理論と現実のハザマで戸惑うことがでてくると思います。私の場合、実践と研究の往還はこのハザマから生じることもあるのだと思っています。

Nさんの言うとおりの、今まで私もあまり、理念について考えてはこなかった。すべににある誰かの理念、または共通認識になんとなく従いながら、方法ばかりに気をとられ、授業をこなしてきたような気がする。また、言語とは何か、文化とは何か、

という問いを自分に問い掛けることもなかった。しかし、考えてみると、言語や文化について自分なりの立場をつくることによって始めて、言語教育における自身の理念の方向性が見えてくるのではないかと思う。理念のない実践ほど、むなしなものはない。

クラスメイトのSさんが「日本語教室での自分はティーチングマシンであると言える」とBBSに書き込んでいたことが思い出される。教師がティーチングマシンなら、学習者はラーニングマシンであると言える。人間同士のやりとりというよりも、無機質な、機械的なやりとりは、私にマシンを連想させる。そのような授業、相互関係からは、生きた言葉は生まれくるはずがない。では、そこから抜け出すにはどうすれば良いのだろうか。Nさんの指摘のように、確かに現実の制約は存在する。しかし、先にも述べたように制約の「共通認識」作っているのは日本語教師自身なのだから、まずは教師としての自分達の姿勢を疑ってみる必要があるのではないかと考える。そして、自分にとっての教育理念とは何なのかという、シンプルであるけれど、とても難しい問題について、じっくりと腰を据えて考えてみる必要があるようだ。そしてNさんの言うように、それを持つと持たないのとは大きなちがいになると言える。私は、「共通認識」の制約から解放され、自分なりの理念を持ち、それにそって環境を整え授業を運営することによって、教室をマシンではなく、人間同士のコミュニケーションの場とすることができるのではないかと思う。そして「私にとって言語文化教育とは何か」というこのレポートの課題に自分なりの答えを出すことが、私のことばの教育における理念へとつながることになるのだろう。

3-3. 私にとって言語文化教育とは何か

講義の始めに書いたレポートに私は、言語文化教育について次のように書いている。

私は自己の文化と他者の文化が交換される過程に注目したい。その中で葛藤が生じたとすればどう乗り越えていくか。気づきがあったとしたら、どう深めていくか。共感が生まれたら、それをどうやって表現していくか。それによってどんな文化が創造されていくか。これらに注目することによって、言語文化教育のあり方が見えてくる。自分の中に根付いている文化を掘り起こすこと。それを言葉によって他者と交換していくこと。その往還作用によって自分の文化を肉付けし、創造して行くこと。この活動を活性化させることが言語文化教育の役割ではないだろうか。

基本的に今もこの考え方は変わっていない。そして最後に「私にとって言語文化教育とは、相互関係の中で育まれていく言葉と文化の往還作用を活性化させ、創造性を引き出すことである」という仮説を書いて結んでいる。これは言いかえると、お互いの文化を言葉によって交換させることによって新しい文化を創り上げていくことであるとも言える。すでに出来上がった「情報」としての文化、例えば伝統文化などは、それに直接、関わる人でない限り、なかなか新しい何かを創造することはできない。外側にある文化は「情報」でしかなく、それを自分にひきつけて考えることが出来ない限り、「文化」は「内容」として自分の中には根付かないからだ。

私は先に「考えた末に生み出した言葉が他者に伝わったとき、そして、その言葉によって他者との間に、かりそめでも合意が形成されることが実感できたとき、私はうれしくて心がふるえた」と書いた。「合意なんて、共感なんて、そんなもの幻想だ」と言われるかもしれないが、私はそこに価値を置きたい。私は自分の言葉（文化）が他者に伝わったその時点で合意は始まっていると考える。結果的に共感を得られなかったとしても、自分の考えを他者に伝えることができ、他者の考えも理解できればそこにある種の達成感が生まれるはずだ。そして、その達成感が、新たなモチベーションとなり、その人の言葉と文化の成長をうながすことにもなる。

言葉と文化の成長を活性化させるためには、じっくりと自分と向き合い、他者と向き合うことが必要になる。この向き合う姿勢は、学習者だけではなく、教師にも言えることである。そして、私は情報や共通認識にとらわれず、ひとりひとりの持つ内容を深められるような授業を目指したいと考えるようになった。ひとりひとりの内容を深めるということは、「個の文化」を育てていくことにもつながるからだ。そして学習者とともに自分の「個の文化」も創り上げて行きたいと思っている。しかし、目に見えない何かを探るのは容易ではない。学習者の中にある内容や「個の文化」を形あるものにするために、言葉・文化を探すことは、ある意味、苦しく、大変な作業であると言える。しかし、その大変な作業に真剣に取り組み、表現するための言葉を掘り起こせたとき、その言葉・文化は、確実に自分のものとなるはずだ。そうやって体得された言葉・文化こそが、本当の意味での「私のことば」になり得るのだと思う。また、表出された他者の言葉によっても、考えさせられ、刺激され、「私のことば」は再構築されていく。言葉や文化は、自己完結するものではなく、こうやって、形を変えながら育てられ、成長していくものであると考えられる。また、他者との関わりによって、考える源が生まれ、それが新しい動機となり、言葉を紡ぎ出すことにつながる。

私は教室内で、マシンのように無機質な言葉のやりとりをするのではなく、生身の人間として、生きた言葉のやりとりを実現させたい。そして、複数の他者との言葉のやりとりによって、一人一人の持つ言葉や文化を磨き上げていきたい。

これが現在の私にとっての言語文化教育についての立場であると言える。

4. おわりに

言語文化教育の授業やBBSのやりとりを通して、情報について再考することができた。教師の一方的な情報提示のあり方に疑問が生まれ、学習者がそれぞれに自分の中にある内容、文化を発見する必要があると考えられるようになった。しかし、一人一人の内言が外言化されたとき、外言化されたものは、本人にとっては切実な内容であっても、他者にとっては一情報に過ぎないとも言える。だからと言って、他者の言葉を情報と切り捨て、自己の持つ内容にばかり目を向けるのでは、言葉や思考は閉塞する。相互作用も生まれえない。それを避けるためにも、教師の支援が必要になるのではないか。支援のあり方は、今後も実践を通して考えていきたい課題である。

そしてクラスでのインターアクションを通して、「共通認識」についての問題意識が生まれた。「共通認識」は文法だけではなく、文化についての捉え方や教室のあり方にも影響を与える。集団は個人によって形成されているわけだから、個人が変われば「共通認識」は崩れていくと考えることもできる。そのためには、教師一人一人が、理念を持つことが大切であり、その理念にのっとった環境設定や方法を模索する必要があるのだろう。言葉や文化を静的、固定的に考えるのではなく、動的、創造的にとらえ、言葉や文化の成長をうながすような教室実践を目指していきたいと考えている。